

調査報告

ロマンス言語学の論点—ある調査報告より

Aspetti problematici della linguistica romanza

A proposito di alcune recenti indagini

菅田 茂昭

Shigeaki SUGETA

1. ロマンス語にみられる地中海的要素? — 語頭におけるC->G-について

第 XXI 回国際ロマンス言語学会大会 第 VI 部門: 地中海の言語と文化史 (パレルモ大学、1995 年9月18日—24日)において標題のテーマで発表し、興味深いテーマであるという批評(T. De Mauro ほか)と同時に基層説はなるべく控え目にといった批判(A. Roncaglia ほか)もいただいた。

ロマンス語の研究者にとって「肘」を表わすフランス語の *coude* (<CUBITUS) がイタリア語では *gomito* であることを説明するのは容易ではない。ノルマンディー方言の *cat* 「猫」(<CATTUS) がフランス語では *chat* だがイタリア語では *gatto*、スペイン語、カタルニア語などでも *gato* といった語頭のC->G-は W. Meyer-Lübke いろいろ孤立現象とされている。“Dans toutes les langues romanes nous trouvons plus ou moins répandus des exemples isolés d'une initiale sonore au lieu d'une initiale sourde. Il ne peut être question d'une règle précise, mais seulement d'une influence spéciale pour chaque fait, il y a donc lieu d'étudier chaque cas en particulier” Meyer-Lübke, *Grammaire* (1890-1906, vol. 1 : 377). 無声の閉鎖音が語中(母音間)で有声化する地域は区画されているが、語頭ではこのような変化は少ないからである。

ラテン語の CATTUS 「猫」は、北アフリカ起源だろうが、C- をそのまま保持したノルマンディーと ch- へと口蓋化した北フランスを除くと、有声化が優勢である。pt., sp., cat., pr. *gato*, ast. *gatu*, rh. *gat*, friu. *giat*, it. *gatto*, log. *gattu*, *battu*, camp. *attu*; norm. *cat*, fr. *chat*. Meyer-Lübke はギリシア語起源のラテン語における語頭の有声化を指摘しているが、試しに REW にみられる C->G- を調査したところ、CA>ga を中心におよそつぎのような割合で起こっていることが知られたことを報告しておきたい。 CA>ga : 48/374, CO>go : 29/328, CU>gu : 12/87, CR>gr : 20/66

主要言語に限らず方言を含む少数言語を対象とすれば、C->G- が必ずしも孤立した事例ではないことが分かる。この現象を説明するために G. Devoto (cfr. *Il linguaggio d'Italia*, 1974) の印欧語に先行する地中海語の存在を仮説することができないだろうか。語彙の分野で「馬」EQUUS に対して CABALLUS の方は地中海起源の要素と考えられるとすれば、音のレベルでも類似の現象の存在を推定することは可能である。閉鎖音に有声・無声の対立をもつラテン語に対して、ローマニア各地の碑文、さらにプローブスの付表(たとえば *calatus non galatus*) などから帰結されるようにこの種の対

立をもたない言語層の推定により、ロマンス語圏における語頭の C-と G- の共存あるいはズレをその投射したものと受け留めようというひとつの提案である。

La Spezia-Rimini 線が無声閉鎖音の母音間での有声化をはじめ、語末子音 -s の保存など若干の現象に基づくローマニアの東西 2 分化に果たす役割は疑う余地はない。しかしながらローマニアを 2 分する基準のひとつとなる、この閉鎖音の有声化にとって、“母音間”という同化のための環境が必要条件をなしているが十分条件ではないことは、ローマニアの片側でしか働いていないことから明らかである。しかもおなじ環境に置かれていながらなぜ西側と東側で異なる結果を生じたかは厳密には問われないままである。これまで学者たちの興味をしりぞけ、1 世紀を超えて未解決のままに置かれた標題のテーマを補足的に説明するには地中海的要素を追認することの意義をまったく否定する訳にもいかないように思われる。さらに 2 重子音の単子音化、無強勢母音の体系の分布などの解釈においても、地中海的要素の推定は十分に役立つことが期待される。参考までに G. Rohlfs (*Grammatica storica, morfologia*, 1968:198) はトスカナ地域における *gattivo* (<cattivo) 「悪い」、*garota* (<carota) 「人参」、*gani* (<cani) 「犬」などを挙げている。

2. イタリア語のロマンス語的展望 — 若干の音声形態論的特質について

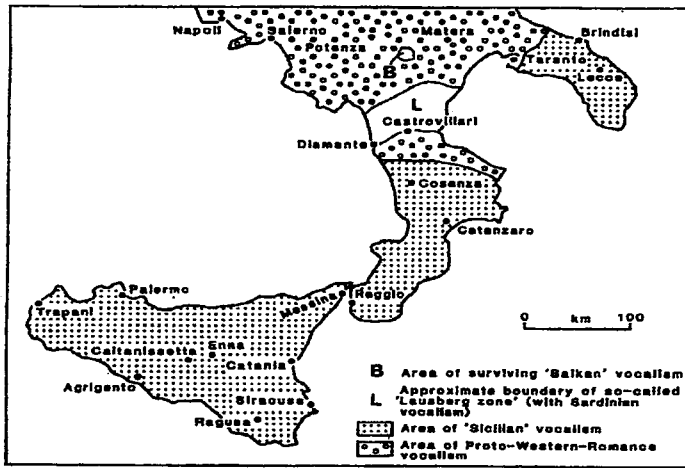
第 XXXIV 回イタリア言語学会国際大会 (フィレンツェ大学・クルスカ学会、2000 年 10 月 19 日—21 日) における発表において、具体的ないくつかの資料の整理に基づくテーマの設定には同様の関心を示されている参加者 (L. Renzi ほか) から賛同をうることができた。

ロマンス言語学には、それぞれのロマンス語は系統上の共通の特性のほか、自他を区別する固有の特質を備えているという認識がある。しかしながらこの固有の特質なるものが同時にイタリア半島の諸方言のなかにもしばしば見受けられるという奇妙な現象に注目したい。

まづこのテーマに対して浮かぶ最初の疑問はイタリア半島は La Spezia-Rimini 線に区切られているからには、少なくとも東西二つのタイプのロマンス語の特質を併せ持つのは当然ではないか。またイタリア国内に他の一部のロマンス語地域の特質が現れるとしてもロマンス語の成立上驚くには値しないという反論が起こるかも知れない。注目すべきは、個別ロマンス語を区別する多くの特質がイタリア半島に高い比率で重複してみられるということである。さらにはロマンス語の発展段階の通時的諸相がそこに言語地理学 (空間) 的に投射されている場合さえ見出されることである。これはイタリアが M. Bartoli (cf. *Introduzione alla neolinguistica*, 1925 ほか) のいう言語改新の中心であったことばかりでなく、ルカーニアやカラブリアのように比較的孤立した地域に古い層が生き残ったことにもよると推論しうる。さらに驚くべきことは、口蓋化の場合のように発展の出発点から到達点にいたる主要な段階がすべてこの地に生き残っているということである。

興味ある例として、まずある南イタリア方言の母音体系にロマンス語の基本的な三つのタイプ、す

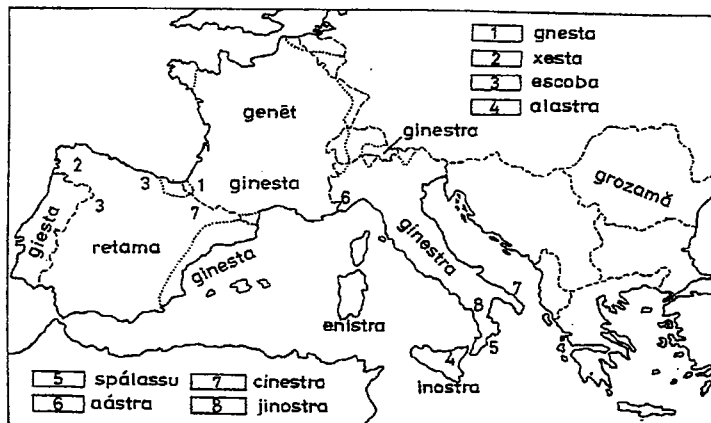
なわちサルジニア語、ルーマニア語、西ロマンス語の母音体系が共存することが知られている（図参照）。



南イタリアの母音体系 (Harris-Vincent, *The Romance Languages*, 1988: 484 より)

メタフォニー、2重母音化はさておき、鼻母音については R. Sampson (cf. *Nasal Vowel Evolution in Romance*, 1999) に委ねるが、逆行同化を前提とする鼻母音は、 $\cdot ND \cdot > \cdot nr \cdot$ タイプの順行同化が優勢である地域ではその存在は仮定しにくいといえよう。ちなみにピカルディー方言における $CLAVEM > cl\grave{e}$ 「鍵」 (cf. Sampson *op. cit.*:116) は稀な例のひとつであろう。

子音に関しては、 $C+{i,e}$ の口蓋化はローマニア全域に及ぶ重要な現象であるが、ことに北イタリア方言にはその変化の全過程が写し出されていることに気付く。また有声の $G+{i,e}$ の口蓋化は無声のそれに必ずしも平行していないが、アラゴン方言とイタリア南部方言との間に興味深い一致がみられる（図参照）。



ラテン語 GINESTA 「えにしだ」を継承するロマンス語 (Rohlf, *Panorama*, 1986: 131 より)

さらに子音連結 -CT (LACTE「乳」など)については、これを口蓋化するイベリア (sp. *leche*) とガリア(fr. *lait*)、逆行同化するイタリア(it. *latte*)、-ptとなるルーマニア (rom. *lapte*) へとローマニアを3分しているが、北イタリア方言には -pt を除く他の地域のすべてのタイプが共存する(そのためにイタリア半島ではイタリア語の逆行同化に中・南イタリア方言の -ND->-nn- 型の順行同化が対立している。) CL- には、標準イタリア語の *chi-* に対して他のロマンス語にみられる [ç], [j] が存在する (cfr. AIS783)。なお、サルジニア語にも例えば Sarule に *œssa*[fɛ:za] <(E)CLESIA「教会」がみられる。

語末子音 -S, -T に関しても、-S 保存のある・なしがイタリア半島を2分しているのに対し、-T はローマニアの大部分で消失したがサルジニアおよび南イタリアのアルカイックな地域には残っている。

形態・統語論に移ると、未来形の形成が注目される (cfr. 菅田 1986『ロマンス語研究』19)。イタリアにはたとえば「歌う」の未来形として、古い層を継承する南イタリアの助動詞前置型の *aggio cantà* (<HABEO CANTARE) —なおサルジニアのログドローロ方言も同じく *app'a cantare, deppo* (<DEBEO) *cantare* —と標準語の助動詞後置型の *canterò* (<CANTARE HABEO) とが共存している。

ここで他のロマンス語の特質とイタリア方言の一部との偶発的ともいえる一致の例を挙げると、まづ北イタリア方言における、フランス語と共通する主語人称代名詞の用法がある: piem. (*mi*) *i-sun fiac* 「私(m)は疲れた」 venez. *ti ti mani* 「君は食べる」。ルーマニア語には存在する中性の定冠詞もみられる: Ascoli Piceno *lo vi* 「ワイン」(Rohlfis 1968:109)。Campobasso ではおそらくノルマンディーを介したケルト起源の20進法も見出される: *ddu v'ndâne e quatt'*「44」(R. Frattolillo di Zinno, *Appunti sul dialetto di Campobasso*, 1985:46)。サルジニアのログドローロ方言にはポルトガル語の人称不定詞と同じ用法が高齢者の間で用いられる: log. *chelio a benneres tue* 「私は君に来て欲しい」

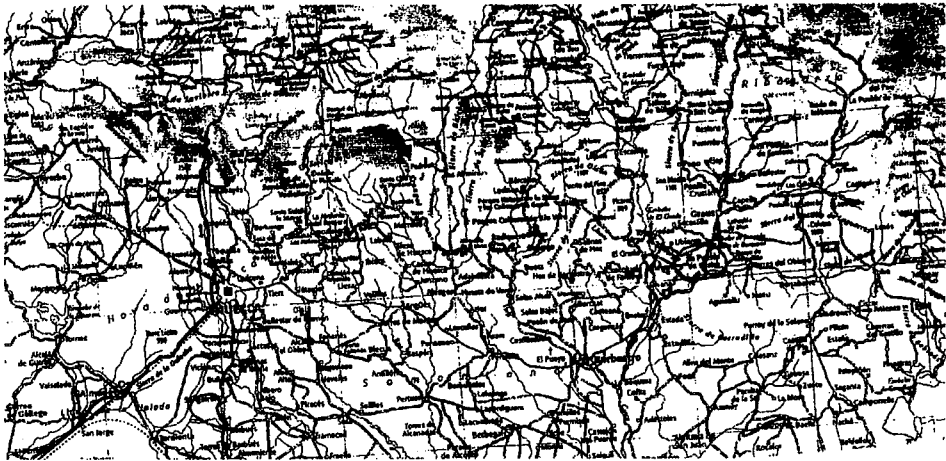
スペイン語やルーマニア語を特徴づける直接目的語(人を表わす)の前の前置詞の用法もサルジニアと南イタリアに一致例を見付けることができる。

サルジニア島のバルバーギア地域における半過去と遠過去の混同にサレント方言でも出会う。サルジニア語やルーマニア語における副詞の接尾辞 *-mente* の欠如はトスカーナ方言を除くイタリア諸方言にも当てはまる。しかしながら標準イタリア語のなかで *chiaro* と *chiaramente* 「明確に」のように二つの形式が共存したり、語形成の分野で派生と合成が地理・類語的とも呼べるような方法で方言と標準語との間を it. *portacenere* 「灰皿」に対する nap. *ceneriera* (cfr. fr. *cendrier*) のように往来する例は興味深い存在をなしているといえる。

以上のごとくイタリア半島はしばしばプチ・ローマニアと呼ばれる所以である。

3. ウエスカ地方の -ND- > -n- について

中・南イタリア方言の -MB- > -mm-, -ND- > -nn- については、古代イタリアのオスク・ウンブリア語基層説が一般に知られている。同様の現象がことに後者に関し、スペインのウエスカ (Huesca) 地方にみられ、かつてこれをめぐりイベリア語基層とせず、地名の起源からも予測されるように古代ローマにさかのぼり、オスク・ウンブリア人の集団渡来に由来すると説く R. Menéndez Pidal に対し、地理的な隔たりを理由に W. D. Elcock の反論が挙げられた (cf. A. Zamora Vincente, *Dialectología española*, 1967: 235)。その現地における実体はいかにと 2002 年 9 月この地に滞在した折、スペイン語の *cuando* 「いつ」に対して *cuán* が書きことばとしては存在する (cf. Francho Nagore, *Gramática de la lengua aragonesa*, 1989: 255 など) が、ウエスカの市街地で直接耳にする機会にはめぐまれなかった。しかしながら 1 例ではあるが、ウエスカ市から東方へ 60 キロ程度離れた、古代ローマへの縁を想わせる La Puebla de Castro (地図参照) と呼ばれる村では話しことばとしてこの形式が存在することを確かめることができたことを簡単に報告させていただきたい。



付記：以上の調査研究に当たり、科研費および早稲田大学特定課題研究助成費をいただいたことに感謝します。